

小祠に残る住まいの記憶

森 隆 男

1 はじめに

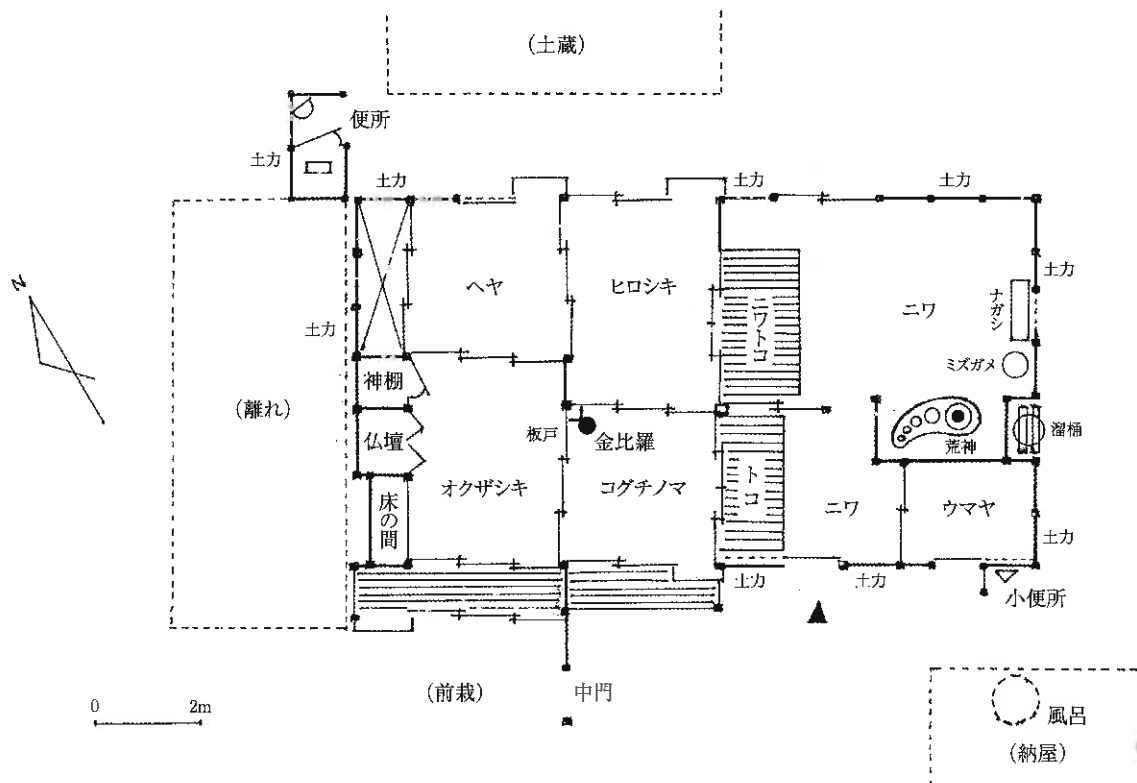
奈良県生駒市に「食違い四間取り」の古い民家が残っているとの情報を得て、学生たちと同市高山の谷村家を訪れた。当主の勲氏（1930年生まれ）によると初代が江戸時代に建てたと伝承されているということであったが、それ以上の情報はなかった。しかし、思いがけないところから嘉永7年（1854）の建築年が判明した。部屋の隅に安置した小祠の裏に上棟の年月が墨書されていたのである。

2 谷村家の概要

谷村家は、山を背にして建つ茅葺入母屋平入りの民家である。土間部分のウマヤや台所は改築されているが、ほかの部分はほとんど手が加えられていない。建具も板戸が残されているなど、全体的には建築当初の状況を伝えているといえる。

図のように土間の割合が多く、「煙返し」の奥には5穴の竈が設置されていた。ニワトコは大和や河内地方に多くみられる板敷きで、履物を履いたままそこに腰をかけて昼食を取る。ヒロシキは朝食と夕食の場であるとともに、家族がそろって団欒のときを過ごす部屋になる。ヘヤは寝室で、半間の開口部をもつ比較的閉鎖的な空間である。コグチノマとオクザシキは接客空間である。あらたまった客は奥座敷に招きいれられた。葬儀などで多くの人が集まる場合は、すべての建具を取り払って4部屋とも使用したという。

主屋の裏側には、建築当初のものと思われる大規模な土蔵が建てられている。主屋の上手には4畳半2間の離れがほぼ接して建てられているが、少し遅れて建てられたようである。また下手の前面には風呂を備えた納屋が建てられている。



谷村勲家平面図（ナガシ、かまどは復元 原図作成：裕有美子・藤田奈々）

オクザシキには造り付けの仏壇と神棚があり、祖先の霊と伊勢神宮の神、氏神などが祀られている。土間に設けられた竈の最大の穴には常に大鍋が据えられ、蓋の上に松の枝を飾っていた。三宝荒神の依り代である。ナガシの上には三宝荒神の神札が貼られていた。さらにコグチノマの隅の鴨居付近には棚が設置され、金比羅宮の神札を納めた小祠が安置されている。その前には丁寧な造作の燈籠が吊られている。

3 建築年を記した小祠と初代繁蔵

この小祠は幅16cm、奥行8.5cm、高さ25cmで、裏面に「奉上棟 嘉永七寅年 五月吉日」の墨書があり、谷村家の建築年を知ることができた。勲氏も今までこの小祠をおろしたことがなく、また金比羅宮について、当家には伝承がない。誰が何のためにこの小祠を安置したのであろうか。

この小祠が安置されている場所はコグチノマであるが、図のように4部屋のほぼ中央に位置することになる。上棟の日を墨書している点から、金比羅の神は住まいの守護神として勧請されたと考えらるべきであろう。ちなみに祠の中には3枚の神札が納められており、最新の神札にのみ明治24年12月の日付が刷られているが、あとの2枚は近世末期から明治にかけて版木で刷られたものである。

また仏壇の中に、初代から書き継がれた当家の歴史を記した書付が残されていた。これによると、初代繁蔵は文政9年（1826）に生まれ、明治22年に死去している。当家の住まいは初代繁蔵が28歳のときに建築したとみてよからう。彼はその後、慶応2年（1866）には領主の旗本森家の年寄役を仰せ付けられ、明治5年に副戸長、その後は教育関係の責任者を歴任し、近世末期から近代にかけて高山地区のリーダーとして活躍したようである。

以上のように、コグチノマに祀られた金比羅宮は谷村家の初代繁蔵が住まいの守護神として勧請し、以後も代々祀り継がれてきたことがわかる。

4 金比羅宮の神に期待されたもの

谷村家が建築された嘉永7年には、ペリーが再び来航して日米和親条約が締結された。この

ような情報は和の農村で若くして初代当主になった繁蔵の元にも届いていたはずで、金比羅宮の神を勧請して小祠の裏に記した墨書に、激動の時代にあつて住まいと「家」を守ろうとする彼の強い意思をみることができよう。

また民家の建築年は、棟札を残すことがまれで、新築に関わる記録「普請帳」が残されていることもあるが、ほとんどの事例で不明である。この地域において民家の編年の作業を進める上で、建築年が判明した谷村家の事例が重要な基準になるとと思われる。



写真1 谷村勲家主屋



写真2 金比羅の小祠と吊り灯籠



写真3 小祠裏の墨書